

# 国立療養所大島青松園とモロカイ療養所の未来

——ハンセン病者の絶対隔離から開かれた社会空間へ——

成城大学大学院 社会イノベーション研究科  
社会イノベーション専攻 博士課程後期 小坂 有資

## 1 目的

本報告の目的は、島にあるハンセン病療養所の将来構想を考えるための1つの方向性を示すことである。日本のみならず世界においても、ハンセン病療養所の多くは必ずしも人々が訪れやすい場所には存在しない。特に、島にあるハンセン病療養所は、他のハンセン病療養所に比べ、より一段と地理的に隔離されている。このような島の療養所で暮らしている／していたハンセン病患者やハンセン病療養所の記憶を、ハンセン病患者以外の人々が継承していく可能性について考えてみたい。

## 2 方法

瀬戸内海の離島に存在する国立療養所大島青松園とハワイのモロカイ療養所（カラウパパとカラワオ）の現状と将来構想に関連するインタビュー調査と参与観察にもとづいたデータを使用。この2つの療養所を取り上げるのは、次の理由からである。島にあるハンセン病療養所の先行研究では、ハンセン病者の隔離が主たる論点となっている（Edmond 2009: 143-177）。ハワイの隔離様式は、相対的隔離（ノルウェー方式）ではなく絶対的隔離（ハワイ方式）であり、日本の「絶対隔離政策」と類似の様式であった（日弁連法務研究財団ハンセン病問題に関する検証会議編 2007: 610）。しかし、このような絶対的隔離を目的とした国立療養所大島青松園やモロカイ療養所は、それぞれ国立（歴史）公園の一部となっており、現在では隔離あるいは避難所（アジール）の機能のみを有した施設とは言い難くなっている。加えて、国立療養所大島青松園は、2010年から3年毎に開催されている瀬戸内国際芸術祭の舞台のひとつとなっており、海外からの来場者もいる。

## 3 結果

瀬戸内国際芸術祭の活動により、ハンセン病患者やハンセン病療養所の記憶の継承に関わることのできる継続的な仕組みを形成しつつあることが明らかにされた。また、カラウパパ国立歴史公園（モロカイ療養所）ではガイドツアーがあり、そこではハンセン病問題について語られている。それだけではなく、モロカイ療養所に関する書籍（Law 2012）が第20回 Ka Palapala Po'okela book award の最優秀賞を受賞し、このような書籍を通じてハンセン病問題に対する認識が広がっており、また記憶の継承を立法化によって可能にしようとする動きがあることも明らかになった。

## 4 結論

記憶を継承していくための試みが、国立療養所大島青松園とモロカイ療養所において様々な形で展開されていることから、それらがハンセン病患者やハンセン病療養所の将来構想の1つの方向性を示している。

## 文献

Law, Anwei Skinsnes., 2012, *Kalaupapa: A Collective Memory*, University of Hawaii Press

Edmond, Rod., 2009, *Leprosy and Empire: A Medical and Cultural History*, Cambridge University Press.

日弁連法務研究財団ハンセン病問題に関する検証会議編, 2007, 『ハンセン病問題に関する検証会議最終報告書』明石書店。